読書

パンデミックの世紀

マーク・ホニグスバウム 著
鍛原　多惠子 訳

長崎大学教授
山本　太郎 評

人の移動、都市化、グローバル化に導かれ

二〇世紀初頭のスペイン風邪が、あれほどの速さで拡大した背景には、第一次世界大戦という人類史的出来事があった。肺炎が最初に確認されたアメリカでは、戦争準備として多くの若い兵士が兵舎に集められた。そしてそれは巨大で未曽有の免疫実験場となった。工場労働者、農業従事者、機械工、大学卒業生など。あらゆる職業や背景を有する人がこれほど大規模に密接して集められ、生活をともにすることはそれまでなかった（一九一七年に三七万人規模であったアメリカ陸軍は、一九一八年一月には一五〇万人に増え、大戦末期の同年一一月には陸海軍合わせて四七〇万人にまで達した）。多様な背景のなかには、都会で育ったものもいたし、田舎で生まれ、そこで育ったものもいた。自動車やバスもなかった時代、田舎で育ったものの多くは、麻疹や化膿性連鎖球菌感染症に罹患することなく育つことも多かった。少なくない数の若い兵士が感染症に倒れた。

状況は、ヨーロッパでも同様だった。北フランスには二つの大陸から膨大な数の男性が集まった。パンジャブ地方のインド兵、ナイジェリアやシエラレオネからのアフリカ兵、中国の苦力やベトナム、ラオス、カンボジアからの労働者などである。そうした場所が感染症の巨大な孵卵器となった。それが、新型のインフルエンザであったスペイン風邪をあれほどまでの速さで広める原因となった。あの時期、あの場所でなければ、スペイン風邪の世界的流行は異なる様相を呈した可能性は高い。

あるいはエイズもそうだ。病気がパンデミックとなるには、植民地時代の鉄道や道路の建設、それに伴う男性労働者の性別不均衡な集積、それによる性産業の興隆がエイズをパンデミックへと導くものとなった。

二〇世紀は、そうした感染症をパンデミックに導く多くの要因が現れた時代でもあった。人の移動、都市化、グローバル化などなど。その意味では、二〇世紀はまさにパンデミックの世紀だった。

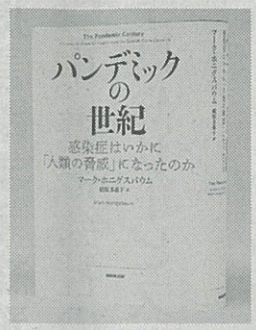
こうした状況は、パンデミックに病原体の存在は必要だが、それは必要条件であって十分条件ではないということ、そして同時に、病原体がパンデミックに至るにはその時々の社会のあり方のようなものが影響している可能性を強く示す。著者は、ポリオやペスト、あるいはエイズやSARS（重症急性呼吸器症候群）、エボラ出血熱、ジカウイルス感染症、新型コロナウイルス感染症を取り上げた上で、人間の「認識の盲点」を突くパンデミックに対抗するには特定の分野の専門知だけでは不十分であり、生態学的・免疫学的・行動学的要因を総合的に分析する必要があると言う。

著者であるホニグスバウム氏は医学史家で、ロンドン大学シティ校ジャーナリズム担当上級講師でもある。五四二ページの大著であるが、訳もこなれており読みやすい。おすすめの一冊である。

◇

マーク・ホニグスバウム
「ガーディアン」紙の調査報道記者等としてキャリアを積んだ後、博士号を取得。感染症の歴史を専門としている。

かじはら・たえこ　翻訳
家。米国フロリダ州ニューカレッジ卒業（哲学・人類学専攻）。訳書多数。



NHK出版
3850円

ユダヤ人迫害の個人史、公共史

シラク大統領前任のミッテランが退任直前にも国家と